

Leo J. Elders:
The Philosophical Theology of St. Thomas Aquinas,
pp. ix+332, E. J. Brill, Leiden, 1990.

稲垣良典

本書はかつてわれわれの学会に所属し、現在オランダ、ロルドック神学大学を本拠に欧米で精力的な研究・教育活動を続けているエルダース神父が、長年欧米の諸大学で行ってきた講義をまとめたものであり『歴史的視野における聖トマス・アクィナスの形而上学』という表題で、オランダ語、ドイツ語、英語版が公刊された著作の第二部である。第一部では共通の有 (ens commune) について、つまり有とその諸特性(もの、一、真、善、美)、可能態と現実態、実体と付帯有などについて考察がなされたが、第二部である本書では共通の有の原因について、つまり第一原因としての神についての考察がなされる。叙述はトマス『神学大全』の順序に従って進められており、西洋哲学における「神」観念、およびその否定の歴史についてのべた後、まず神の存在 (an sit) の問題が「神の認識可能性」と「五つの道」の表題の下に考察される。続いて神の何であるか (quid sit) —あるいはむしろ「何であらぬか」の探求(単純性、善性、無限性、不可変性、永遠性、一性など、神の「属性」の探求)が「否定の道」「因果性の道」「優越の道」の順序で三つの章に分けて取りあげられる。次に神はわれわれによっていかなる仕方でも認識され、名付けられるか、という問題を考察した上で、神における知と意志(愛)の働き(摂理、全能の問題もふくめて)が考察され、さいごに創造および神と被造物との関係が論じられている。

「歴史的視野における」(in a historical perspective) という表題の言葉が示しているように、本書の特徴はトマスの形而上学を、それが形成され、また著述された歴史的枠組のうちに正確に位置づけ、評価しようとする点に認められる。このため著者は序章における哲学的神学の歴史(プラトン、アリストテレスからプロセス神学にいたる)、第一章における神の観念の歴史(古代ギリシア哲学からベルクソン、W. ジェイムズにいたる)と無神論の歴史、第二章における神の存在論証可能性に関

するトマスの洞察がかれ以後しだいに見失われていく歴史、第三章における「五つの道」の各々の歴史的源泉についての叙述、第十章における世界の起源に関する哲学的理論の歴史、その他いたるところで詳細な歴史的考察を行っている。そこではアリストテレスの形而上学および自然学的著作についての註釈を書いたほか、中世、近世、現代におよぶ広汎な哲学史的研究に従事してきた著者の持味が遺憾なく発揮されている。おそらくこれら歴史的論述は、数多くのトマス研究書の間において本書を際立たせている特徴であるといえよう。

しかし、このようなトマス形而上学を西欧における形而上学思想の歴史のなかで正確に位置づけようとする著者の試みは、トマス思想の卓越性と独自性についての著者の評価をいささかも弱めてはいない。トマスの形而上学的洞察は、たんに形而上学的探求の歴史における里程碑の一つではなく、むしろ最高の到達度を示すものと評価されているのである。たとえば、「五つの道」にたいして現代の著名なトマス学者（F. ステンベルゲン、A. ケニー、W. N. クラークなど）が下した否定的評価は、著者によると、トマスの簡潔で単純な定式にふくまれているリアリズムを理解しえないところからくるものである。じつは「かれ（トマス）の形而上学的省察は、その言語的表現がやや背後に取り残され、ただゆるやかな仕方であれ思索と重なり合うにとどまるほど、それほどの高みに達しているのである」（89 ページ）。「五つの道」が「千六百年以上に及ぶ、神の存在を証明しようとする哲学的努力を集約し、それを統一的構造と厳格な形式へと転換したもの」（95）であることを理解する者は（トマス学者の間でさえ）すくないのである。

著書によると事物における神の内在と超越という問題に関するトマスの立場は、プラトンの分有理論をトマス自身の存在の哲学のレベルへと転移させたものであり、そこでは神の超越と内在が一つの総合へともたらされていて、多様な、そして屢々相互に対立的な諸見解の間において、驚嘆に値する仕方であらう中道を維持している。そして、スコトゥスやスアレスをふくめて、トマス以後のスコラ学者たちはトマスの立場の卓越性を十分に理解できなかったのだ、と著者は付言する。

さらに、神はわれわれによっていかなる仕方であらう認識されるかという問題に関して、著者は、トマスの均衡のとれた解決は神的超越を保全すると同時に、被造物とそれらの原因との間の何らかの類似を確保するものであることを指摘した上で、次のようにのべる。「この教説の精妙さと平衡は常に理解されてきたとはいえない。……（批判

者たちは) 聖トマスが神・言語 (God-language) の文法をいかに細心の注意をもって仕上げたかを評価するかわりに、聖トマスはたとえば《神は愛である》という文が反駁されることを、それらの文の意味にかぎりなく新しい限定を付加する (そのために神は千もの意味の制限 [qualification] によって殺されてしまうのだが) ことによって逃れようと試みている、というふうに考えるのである」(214)。このような論評は、著者がトマスの形而上学的洞察の独自性と卓越性をいかに高く評価しているかを示すものといえよう。

さきにふれたように、著者は『神学大全』それ自体は「聖なる教え」(sacra doctrina) つまり「啓示」神学に属する著作であるが、そのなかで「哲学的」神学について論じられている部分をそのままの順序で取り出すことによってトマスの「哲学的神学」を再構成することが可能である、との考えにもとづいて本書の論述を進めている。したがって、本書を構成している諸章は、それぞれ『神学大全』第一部の哲学的神学にかかわるいくつかの箇所についての詳細な註釈であるといえる。したがって、ここでそれらを順をおって要約紹介することはあまり意味がないであろう。むしろ以下においては、著者の註釈のうちとくに重要であると思われるものをいくつか取り上げることにしたい。

第一に著者によると、哲学的神学ないし自然神学を批判もしくは非難する論者——経験主義的ないし実証主義的な哲学者からバルトのような神学者にいたる——の多くが「哲学的神学においては神が学的認識の対象である」という前提 (神は通常の経験の対象ではないにもかかわらず) に立ってその批判ないし非難を提示している。ところがそれは根本的な誤解であって「トマスにとっては神はけっして (人間的認識の) 《対象》 (an object) ではない、なぜなら神はわれわれの理解をはるかに超えているからである」(22) と著者は指摘する。同様の指摘は第二章においても繰返されるが (58～, 67)、その要点は、神は人間の自然的理性によって認識可能であるという肯定そのものが、トマスにおいては強い否定神学の精神によって滲透されているということである。「(トマスにおいて) 哲学的神学は主要的に否定的知識なのである」(22)。

第二に注目し値するのは、トマスの哲学的神学において感覺的経験が果している不可欠の役割についての指摘である。トマス哲学における強い「経験主義」的要素については様々の視点から十分な説明がなされているが、その哲学的神学における感覺的経験の決定的な重要性——そして「否定神学」的要素との結びつきにおける——の強

調は、著者のトマス学者としての立場をあきらかに示すものといえる。たとえば、「五つの道」の出発点はいずれも感覚によって捉えられた事実であり、物理的実在についての経験であることは周知の通りであるが、このことが数多くの神の存在論証の試みの間にあっていかに特異なことであるかは往々にして気付かれていない、と著者は指摘する(70)。いうまでもなく、トマスの「五つの道」は歴史的先例を有するが、トマスほど哲学的神学において感覚的経験に密着しつつ否定神学の立場を徹底させた試みは(かれ以前も以後も)皆無であり、著者によるとそこにわれわれはトマス独自の「リアリズム」を見てとるべきなのである。

別の言い方をすると、トマスの哲学的神学はかれの形而上学の一部であるが、かれは不思議なくらい、神の「形而上学的本質」についての思弁にふけることをしない。かれは他の多くのスコラ学者たちと違い、「自己原因性」(aseitas)あるいは「無限性」(infinitas)など、これこそ神の根本的属性とされるものに注目し、それから神に関するあらゆる認識を演繹しようとする試みとは無縁なのである(147, 160)。これはさきにふれた、神はけっして人間的認識の「対象」とはなりえないというトマスの根本的主張と対応する。一方においてトマスは神が感覚的に経験される事物において(存在論的に)現存していることを洞察する(199)。他方、われわれがこの神について到達しうる究極の認識は、おのれが神について無知であることを悟ることにほかならない。

このように、あくまで感覚的経験に密着しつつ神を認識することが可能であることの肯定と徹底した否定神学的思考が結びついていること、まさしくそこに著者は神に関して一義的に考える誤りを避け、哲学的神学において類比の論理を貫徹させたトマス独自の立場を見てとる。

この他、より特殊な問題に関して著者が提示している数多くの興味深い見解を紹介することは断念せざるをえない。最後に一言感想をのべると、著者はトマスの哲学的神学を斥ける論者たちの誤りを指摘するだけでなく、トマス解釈に関して多くの著名なトマス学者の見解を誤りとして斥けている。このような対決、論争はもちろん必要であるが、そのさいこれらトマス学者がそれぞれのパーソナルな哲学を形成しており、それにもとづいてトマス解釈を行っていることに十分な注意がはらわれているかどうか、疑問を感じた。しかし、そのことは別として、われわれのかつての同僚によってこのような、豊かな学識に裏打ちされた堅実なトマス研究書が公刊されたことを喜びとしたい。